

分布している可能性が高い。また、今回の記録により中部・近畿に分布の空白地が存在することになった。これらの地域からの発見が期待される。

庄原市立比和自然科学博物館に収蔵されている、広島・島根両県各地の調査で得られた多数（約300頭）のヨツボシテントウダマシ属の標本を検したが、本種が得られている地点は圧倒的に少なく、局地的な分布を示すように思われる。江の川流域では見出された地点が多いが、偏りが大きい。島根県川本町因原では例外的に多数の本種が得られており、その一方でヨツボシテントウダマシはほとんど得られていない。当所ではヨツボシテントウダマシよりも優占している可能性が示唆されるが、現時点では定性的な調査のみであり、定量的な調査が必要であろう。また、岡山県では総社市や倉敷市などの平野部でも得られている一方で、広島県では福山市の芦田川や広島市の太田川の調査の試料を再検討したものの、本種は見出されなかった。

Sogoh & Yoshitomi (2017) では多数の四国産ヨツボシテントウダマシ属の標本を検しているものの、本種は検することができていない。広範囲に分布する可能性が示唆される中国地方の状況とは対照的で興味深い。一方で前述のように局地的な分布をしているために発見されていないとも考えられる。

最後になったが、収蔵標本の調査に関して便宜を図っていただいた丸山宗利博士（九州大学総合研究博物館）、奥島雄一博士（倉敷市立自然史博物館）、進藤眞基氏ならびに藤田浩司氏（庄原市立比和自然科学博物館）、本稿を校閲してくださり有益な助言をいただいた吉富博之博士（愛媛大学ミュージアム）に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 亀山 剛・西 真弘・中村慎吾, 2009. 江の川の昆虫類 2004年の調査結果. 比和自然科学博物館研究報告, (50): 1-209.
- 松田 賢・中村慎吾, 1999. 江の川水系の昆虫類. 比和自然科学博物館研究報告, (37): 39-176.
- 中村慎吾・野嶋宏一・藤井陽子, 1998. 広島県世羅台地の昆虫類. 比婆科学, (186):1-122.
- 中村慎吾・羽尻光宏, 2007. 島根県高津川の昆虫類 2005年の調査結果. 比和自然科学博物館研究報告, (48): 103-264.
- Sogoh, K. & H. Yoshitomi, 2017. A revision of the genus *Ancylopus* (Coleoptera, Endomychidae) of Japan. *Elytra*, Tokyo, New Series, 7: 421-438.
- Strohecker, H. F., 1972. The genus *Ancylopus* in Asia and Europe (Coleoptera: Endomychidae). *Pacific Insects*, 14 (4): 703-708.

(千田喜博 727-0301 庄原市比和町比和 1119-1 庄原市立比和自然科学博物館)
(十川晃一 790-8577 松山市樽味 3-5-7 愛媛大学大学院農学研究科環境昆虫学研究室)

【短報】チビシギゾウムシをヤマブドウから採集

チビシギゾウムシ *Archarius chibi* (Kôno) は、札幌市藻岩山を模式産地として記載され (Kôno, 1930)、その後、本州からは青森県（下山ほか, 1986）および岐阜県（野平, 1986）から、四国からは徳島県（久米, 2009）から初めて記録された。その後も北海道、および本州の東北地方、中部地方の各県からは追加記録が報告されているが、いずれの採集例もピーティングやスウィーピングで偶然得られたものであり、生活史解明につながる知見は得られていないものと思われる。筆者は長野県において本種をヤマブドウから複数個体採集しているので、採集状況を報告する。

4頭, 長野県茅野市春日溪谷, 30. VI. 2012 (図1).

はじめ、バッコヤナギ *Salix bakko* と思われるヤナギ類に巻き付いていたヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch (図2) のスウィーピングで2頭が得られた。本属はヤナギ類から採集される種が多いため、当初はヤナギ類の方を重点的にスウィーピングしたが、同属のムラカミチビシギゾウムシ *Archarius murakamii* (Morimoto) が得られたのみで、本種は得られなかった。

そこで改めてヤマブドウをスウィーピングしたところ、新たに2頭を追加できた。本種は体長2ミリ前後と小さいが、背面の特徴的な斑紋から、野外でもムラカミチビシギゾウムシと明確に区別できた。

本属の種はこれまでブナ科やヤナ



図1. チビシギゾウムシ.



図2. チビシギゾウムシが得られたヤマブドウ.

ギ科の虫えいをホストにすることが知られているが、ブドウ科の虫えいから得られた例は知られていない。単に摂食に訪れていただけかもしれないが、比較的まとまって得られた例として報告しておきたい。なお、本種の属名は森本(2011)に従った。

本知見は、日本ゾウムシ情報ネットワーク(JWIN)の第11回地域ファウナ調査会によって得られた。本調査会は伊澤和義氏にお世話いただいた。また、本種の原記載および属名に関しては野津裕氏に、東北地方の分布に関する知見は尾崎俊寛氏に、植物の種名は久米修氏にそれぞれご教示いただいた。ここに記して厚くお礼申し上げたい。

引用文献

- Kono, H., 1930. Langrüssler aus dem Japanischen Reich (Schluss). *Ins. Mats.*, 5 (1): 1-31.
 久米加寿徳, 2009. 四国におけるチビシギゾウムシの採集例. *へりぐろ*, (30): 44. 瀬戸内むしの会.
 森本 桂, 2011. 日本産シギゾウムシ類の概説. *昆虫と自然*, 46(5):4-15.
 野平照雄, 1986. チビシギゾウムシを岐阜県で採集. *月刊むし*, (185): 40.
 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智, 1986. 6 昆虫・蜘蛛. *下北半島の自然*: 84-142. 青森県立郷土館.

(藤本博文 760-0005 高松市宮脇町 1-17-4)

書評

「カトカラの舞う夜更け」

新里達也 (著) 256pp. 四六判, 海游舎.

2014年の日本甲虫学会の採集例会は、7月に徳島県の剣山で開催された。夫婦池に面した「ラ・フォーレつるぎ山」に泊まり、参加者は年に1回の行事を楽しんだ。夜は宿舎の周辺で灯火採集のセットが準備されていた。白暮に飛来する雑甲虫を採集する人や、それを眺めながら酒を手にして歓談する人がいたなかで、懐中電灯を掲げながら近くの林から宿の前の広場に戻ってきた人物がいた。新里達也氏であった。意外な光景だったので、「何してるの?」と質問してしまった。「カトカラを採りに行ってただけだ……」との返答があり、同氏が甲虫ではない蛾のカトカラに興味を抱き採集していることをこのとき初めて知った。

本学会の前会長である新里達也氏は、言わずと知れたカミキリムシの研究者。著書で「日本産カミキリムシ」(大林延夫氏との共著, 東海大学出版会)があるほか、「野生生物保全技術」(佐藤正孝氏との共編, 海游舎)があるなど保全生態学の専門家としても知られる。そんな新里氏から本が届いた。封を開けると、妖艶な表紙が目飛び込んできた。分島徹人氏の見事な絵で、暗闇に鱗粉を散らしたかのような背景に2頭のカトカラが舞っ

ていて、タイトルは「カトカラの舞う夜更け」とある。「そうか、新里氏は、ついに蛾の本を執筆したのか」と思った。

ページをめくると、意外や意外、蛾(カトカラ)の本ではなかった。もちろん、彼がいま熱中しているのはカトカラであり、この蛾の話も登場するが、本書の主体はこれまでにいくつかの雑誌に書いてきた数々のエッセイで、書下ろしも含まれている。1章が「環境の仕事」、2章が「虫の研究」、3章が「交友録」となっていて、非常に読みやすい。どこを読んでも味わい深いのが、交友録が面白いだろう。虫屋が元気で勢力旺盛だった時代の話がとても面白くて懐かしく、今となっては羨ましくもある。同世代の人はもちろん、年下の世代の人にも是非読んでもらいたい本である。

私と新里氏が初めての出会ったのは、台湾の埔里であったと思う。「夢虫会」で新堀豊彦さんや高桑正敏さんらと訪台されていたときに宿で一緒になり、屋台に出かけた。その後、日本鞘翅学会や日本甲虫学会の大会・例会で同席する機会が増え、私が編集する「月刊むし」にもご寄稿いただくなど、交流は増した。

新里氏も還暦を過ぎ、仕事も一線から身を引かれたとのこと。今後も元気でカミキリムシの研究を継続し、後進の指導とともに、大いにカトカラをはじめとした虫との付き合いを楽しんでいただきたいものである。

(谷角素彦)

